

# 「生涯学習機関としての大学」の在り方

## ー日本の小さな実践とアメリカの ベスト・プラクティスの体験を踏まえてー

松 井 純 子  
(ラーニングネットひろしま)

### はじめに

この小論は私自身の日本での学習支援サービスのプロバイダーとしての小さな実践経験とアメリカでのベスト・プラクティスのユーザーとしてのささやかな体験を基に「生涯学習機関としての大学」の在り方に関する実践的研究への資料提供を目的として計画した。ここでいう「生涯学習機関としての大学」とは、学歴や地位にかかわらず、その独自の資源や経験を生かして人々の生涯学習の推進に貢献する地域の知的拠点施設として捉えている。また、実践的研究とは、研究で得た知見を活用した実践と実践の中で遭遇する課題解決のための研究との相互依存的な両者の充実発展を図ろうとするもので、これが私の年来の関心事であり、私の研究と実践のスタンスである。

使用する資料は、米国オレゴン州立大学 University of Oregon(UO)と Lane Community College(LCC)での私自身の学習体験及び両大学の2001-2002カタログと学生サービス事業パンフレット、職員へのインタビュー等と、私が共同代表をしている生涯学習 NPO「ラーニングネットひろしま」の実践活動の

報告レポート等である。

UOは130年の歴史を持つ州立大学で、学部教育で全米ベスト40、対授業料比における教育の質では最優秀大学の一つで、大学院でもトップレベルの州立大学としてランクされている。LCCは膨大な数の全米コミュニティカレッジのトップ15にランクされたり、生涯学習機関として先駆的試みを続けるコミュニティカレッジで、東部の有名私立大学への接続でも評価を確立している。両大学は両校のフルサービスが受けられるデュアルプログラムを制度化している。

分析・検討の手順としては、日本での実践から浮上した問題や課題をめぐって、UO、LCCで学んだ体験と知見を参考にしながら、その対策や解決へのノウハウに関する理解を深めるという手法をとっている。

## 1 「ラーニングネットひろしま」の学習支援活動と検討課題

「ラーニングネットひろしま」は2000年に発足した学習相談、サロン、学習会・イベント・調査研究などのプロジェクトの他、プログラムづくりやコーディネートなどを行う生涯学習NPOである。そこで実施した「社会人のための大学活用フェア」の事業を小論の資料源としている。これは広島市教育委員会等との共催で広島県内の大学開放状況等を紹介するイベントで、本年は4回目になり、①開放状況や社会人プログラム等のパネル、シラバスや大学案内等の大学別閲覧ブース、②大学を身近にするイベント、③大学教職員や「ラーニングネットひろしま」のスタッフ・社会人学生OB/OGによる学習相談、などを行っている。イベントは、①科目等履修生から法科大学院生までの知恵と工夫を語り合うフォーラム、②エルネットオープンカレッジ体験講座とディスカッション、③公民館と大学の協働実践事例発表会、等から構成している。

このような活動を通して、これまでに次のような課題が存在することが明らかになった。

- (1) 新しい制度や大学開放状況の情報が行き届いていない。フェアでのアンケートには「このような情報をもっと広く知らせるべき」との声が毎

回多い。

- (2) 大学組織が縦割りで、地域社会サイドからアプローチし難く、外部からの要望に対して組織的に対応する窓口、市民が気軽に訪れることのできるコーナーを持つ大学が少ない。
- (3) 大学を利用して社会人が学習を進める上で経済的阻害要因が大きい。家事・育児・子供の教育あるいは介護などで経済的責任を負う成人にとって、自分の為の学費を捻出することは容易ではなく、社会人対象の奨学金やローンの設置を求める声は大きい。
- (4) 大学への積極的なアプローチが自ら出来る人と、意志はありながら、躊躇する人の二極分化が起きている。また、何をどのように学べるかについての詳細なアドバイスと計画づくりへの支援が必要とされている。
- (5) 自分の実力について不安を持つ人が多い反面、過剰な自信を持っている場合もあり、適切な学習能力の育成だけでなく、自己診断の方法の確立と修得が必要である。
- (6) 大学でマイノリティとして過ごす社会人学生は孤立感や疎外感を少なからず持っている。それが被害者意識に繋がることもある。

## 2 「生涯学習機関としての大学」への整備要件

これらの課題解決のために必要な対応策として、次のような改善へのノウハウの検討と導入が期待される。

### (1) 学習者の視点に立った情報の加工・提供とポータルサイトの開設

大学の変革や開放状況が十分に伝わっていない現状では、学習者や地域ユーザーの視点に立って、制度の紹介や具体的な活用法、先進事例などを紹介していく必要がある。大学の開放状況や公開講座のような情報を学習者が恒常的に各大学のHPから引き出すのは限界があるし、各自が比較検討するのも困難である。一部の地域や営業サイトでは既に行われているが、各大学へのリンクと共に、制度の説明、社会人向けプログラムの紹介、体験談、公開講座カレンダーなどが、“地域ベースの情報”として学習者の視点から提

供されるポータルサイトが開設され活用できることが望ましい。

## （２）ワンストップの窓口

LCCの正面玄関を入ると、“Students First!”と呼ばれるカウンターがずらりと並んでいる。ここでは入学、奨学金、諸証明書、会計などの事務手続きを一括処理すると共に、総合的な大学情報の提供と照会を行っている。ここは、LCCでの学びのスタートの仕方、アドバイザー等へのアポイントメント、クラスへの登録方法から就職支援…とありとあらゆる事柄の窓口となり、確実に次のステップに進めるようにしてくれる。このサービスはカレッジを訪れる全ての人々に開かれていて、気軽に訪ねることができる。このシステムは全米コミュニティカレッジ協会でも高く評価され表彰も受けている。窓口があるということは大学が組織として対応するという意思表示をしていることを意味する。

## （３）経済的支援システム

経済的な支援へのアプローチとして、UOのCommunity Education Program(CEP)は新しい視点を提供している。CEPは、UOに在学していない住民・通勤者に対して、登録だけで1学期8単位まで、大学・大学院の授業を正規授業料の約6割の料金で受けることができる制度である。入学金も検定料も不要である。しかも、授業料は最初の授業に参加した後、払い込むことができ、クォーター制のUOの場合、この授業料で年間最大32単位をとることができる。それぞれの科目が前提としている条件を学習者がクリアしていれば、席に余裕がある限りこの原則は全ての科目で適用される。多様な種類の学生がいるUOでは、履修登録の順番が学生によって細かく分けられていて、CEPの登録順位は最終になっているので、希望した科目を取ることが出来ない場合もある。この制度を利用して、一定の単位を積み上げてから、パートタイムやフルタイムの正規学生として学位を取得する計画に進む住民も多い。この他、早朝、夕方以降の授業を通常の授業料よりも低く設定して、仕事を持つ人への便宜をはかっている。登録の優先性と授業料の差を生かしたアプローチは大学の社会貢献と空き席を少なくするという経済性の面でも、参考になる。

#### (4) 二段構えの情報提供・相談とアカデミックアドバイザー

大学での学習を希望する人は、大きく二つのタイプに分けられる。何が学びたいか、なぜ学びたいかが明確な人と、漠然と何か自分に合ったものがあるれば、学びたいと考えている人たちである。後者の中には実は大学で学ぶこと自体が、ステータスシンボルであったり、ファッションである場合もある。前者に対しては適切な情報提供が行われれば、相談はより具体的になり、目的を達成し易いが、後者に関しては気の長いカウンセリングに似た相談が必要である。このような相談は個別大学が対応するよりは、大学を超えた大学コンソーシアムのような組織が協力して対応していく方が効果的である。準備段階を十分に支えていくことが大学での学習を充実させることに繋がる。

目的は明確になっても、依然どこで何を学べるか、これまでの学びをどのように繋ぐことができるのかを社会人が探し出すことは難しい。熟練したスタッフが学習者の学習計画と目的に合わせて適切なアドバイスをしてくれると、学習者が期待した以上の効果がある。例えば、私はLCCで英語の話し方のクラスを希望した時、既に満員だった。アカデミックアドバイザーは、私に役者やアナウンサー志望の学生が集まる「Voice and Articulation（発声と歯切れの良さ）」のクラスを取るようアドバイスしてくれた。その結果、私は大変満足の行く授業を受けることができたが、自分だけではとてもたどり着くことはできなかったに違いない。ここでは入学前の人でも相談できる。このような支援システムは学習者一人一人がオーダーメイドの教育を受ける為には欠かせない存在だと痛感した。

#### (5) 学習の質を保証する学習支援センター

多様な学生を受け入れる大学の教育では、レベルを下げるのではなく、学習者がそのレベルに到達するための道筋を見つけ、その支援をすることが課題となる。UO、LCC共に、学習支援センターが充実していて、大学として様々な形で個人の学習を支援している。LCCでは大学で学ぶための学力測定をコンピューターテストで行うが、基準と標準問題を公表し、テストのための補習クラスも開講している。

両校とも、大学教育を受けるに必要な学習スキル等のスキル別、会計・数学等の科目別、女性・障害者など対象別にチューターサービスを原則無料で

行っている。チューターは無償のボランティアから授業の一環の大学院生や上級生、専門のスタッフなど多様である。サービスの場所もカフェテリアの一角など、センターから出て気楽に立ち寄れる場所にある。UO では受講生の多い授業に TA が付き、教員だけでなく TA もオフィスアワーを設けて指導している。大学の要求水準を学生がクリアするように手厚い支援が用意されているのである。

#### (6) ピアサポートと居場所づくり

社会人学生同士が集まって話してみると、個人的な経験のように思われたことが、実は共通の経験や課題だったりすることが多い。また、不安や思いを聞いてもらったり、学習の指導を受けたり、知恵を交換し合うことで問題を乗り越えることができることも多い。このように境遇や課題を理解し合える者同士の助け合いや仲間作りの必要性を学生は身を持って感じている。両校共、社会人学生グループが大学側に居場所の提供を要望し獲得した歴史を持っている。

LCC のウィメンズセンターは成人女性学生のためのボランティアによる居場所づくりがセンターとして発展したものである。現在では専任の教員・スタッフを抱え、独自の正規授業も開発している。コーヒーマシンや紅茶、手作りクッキーが廉価で提供され、図書も置かれ、お弁当を食べたり、宿題を教えあったり、知らない者同士も気楽に話せる雰囲気ですぐにぎわい、駆け込み寺の役も果たしている。

### 3 革新的プログラム

最後に印象に残った UO や LCC における社会人や地域に益する革新的なプログラムを紹介してこの小論の結びとする。

#### (1) 学習スキル

既に言及したことだが、多くの人が自分の実力は大学の授業・研究についていけるのかと悩んでいる。反面、実生活での自信から学業独自のスキルの

必要性を軽く考えている人もある。この関連で全ての人が大学でやっていけるという自信を与えたり、足りないスキルを学べる場、客観的に自分のスキルを見直す場が必要である。

アメリカの大学では、伝統型の学生に対しても学習スキル・学習法についての科目が用意されているが、LCCは学校から遠ざかって久しい社会人対象の学習法を学ぶクラスが正規科目として開講されている。内容はノートの取り方、テキストの読み方からタイムマネジメント、生活を見直すことまで、多岐に渡っていて、私も学ぶところが多かった。日本では学習法の学習が欠如していて、学習のスキルが個人の能力として捉えられているが、個人的対応を越えて生涯学習者としての学習力を確実に身に付けさせるプログラムの開発が急がれる。

## (2) Transition to Success

LCCが開講している「成功へのトランジション」プログラムは人生の移行期にある失業、子育て中、ニートなどの女性が教育・訓練・雇用にアクセスし、経済的に自立するのを援助するプログラムである。これは自己の現状を理解し新しい方向性を探す「ライフトランジション」、キャリアと人生の計画を立てることを目標にした「キャリア&ライフプランニング」と「ディスカッショングループ」からなる6単位の授業科目で編成されている。「ディスカッショングループ」は小グループに分かれていて、他の2つの授業が自分たちの生活にどのように関連しているかについてディスカッションする。同時にクラスメート同士が感情や心配事を共有し、知恵や情報を分かち合うことで、より親しい関係を築き、助け合う仲間になるよう計画されている。単位にはならないが必修科目である。

このプログラムを通過した学生はカレッジの卒業率が高いだけでなく、就職率、大学や大学院への進学率が他の学生に比べて高い事でも定評があり、博士の学位を取った人もいる。アカデミックな知識のエッセンスを学びながら、学習者一人一人がエンパワーメントしていけるプログラムを社会人学生は日米を問わず待ち望んでいる。

### (3) Family and Human Service 専攻学生の卒業プロジェクト

UO の Family and Human Service 専攻の卒業プロジェクトは学生が地域の団体や NPO のために、必要とされているプロジェクトを発案、実施するプログラムである。成果物は団体等で利用されるものという条件が付いており、学生の発案に対して当該団体等のスタッフがアドバイザーとして、また大学の教員がスーパーバイザーとして指導にあたる。題材としては、問題解決、各種のマニュアル、ビデオやパンフレット、事業評価、教材、助成金申請資料の作成などである。私が参加した公開発表会では、DV の現場（例えば、父親が母親をなぐっている場）に居合わせた子供に対処の仕方を教える絵本づくり、留学生の学習パートナーの募集から評価までのマニュアル一式、高校卒業後のヤングマザーの居場所作りなどが取り上げられた。この発表会には地域の NPO や行政職員等が参加していて、その場で例えば絵本では「〇〇の助成を取って全市の小学校に配布できるように働きかけよう」といった具体的な進展が見られる意見交換が行われていた。このプログラムは学生が社会人として大きく成長・自信を得る場であり、実績づくりにもなり、地域にとってもサービスの充実に繋がる。その上、大学は教育・研究という本来の役割を通して社会的な存在感を発揮し、地域貢献できるプログラムになっている。これへの参加は問題意識を持った社会人学生が多いことも特徴であった。

#### <参考ホームページ>

|                        |                                                                                             |
|------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| University of Oregon   | URL <a href="http://www.uoregon.edu/">http://www.uoregon.edu/</a>                           |
| Lane Community College | URL <a href="http://www.lanecc.edu/">http://www.lanecc.edu/</a>                             |
| ラーニングネットひろしま           | URL <a href="http://www.LearningNetHiroshima.org/">http://www.LearningNetHiroshima.org/</a> |